

「変わりゆくメディアのなかの“中国”」の特集にあたって

編集部

二〇〇〇年代以降、中国ではインターネットやSNSの普及に続いて、国家や地方政府が運営する国営メディアに対し、「新メディア」や「自媒体」と呼ばれる個人や企業・団体が作った民間メディアも相次いで登場してきた。

民間メディアが最も多く利用している共有サイトは、大手ネット企業の騰迅が提供する「騰迅視頻」や「土豆網」、二〇〇六年に登場した中国版YouTubeと呼ばれるアリババグループ傘下の「優酷網」、二〇〇九年からサービス提供を開始した「新浪微博」と「哔哩哔哩」(Bilibili)である。これらの共有サイトでは、「新メディア」や「自媒体」が投稿した動画等を視聴できるほか、さまざまな事件や話題について意見を書き込むことができるサービスを提供している。

さらに、二〇一一年に字節跳动有限公司の「快手」(TikTok)、二〇一四年に廈門美図網科技有限公司の「美拍」(Meipai)、二〇一六年に北京微播视界有限公司の「抖音」(Douyin)など新たな共有アプリが次々に登場し、個人やグループが制作したショートビデオはこれらアプリで

広く配信されるようになっていく。

二〇一九年末に発生した新型コロナウイルスの感染拡大は、中国に暮らす人びとをロックダウンなどの厳しい行動規制下に置いた。そのため、前記のようなインターネットサイトは人びとが社会の情勢を知り、コミュニケーションを取るための主要な手段となった。もちろん、強力なメディア規制によって、当局から目をつけられた記事が削除されたり、アカウントが一時的ないし永久に停止されたり、あるいはサイトが閉鎖されたりすることは日常茶飯事である。しかし、娯楽を含め、これらのインターネットサイトが提供する多種多様なコンテンツは、すでに中国人の実生活に深く入り込み、「自媒体」や「新メディア」の発信力は、当局の掌中にあるテレビ・新聞などのマスメディアに勝るとも劣らないものになっていると言っても過言ではない。二〇二一年一二月時点で、中国国内における動画などの配信サービスの利用者は一〇億三二〇〇万人に上るとされる(中国互聯網絡信息中心、二〇二二年二月)。

このように、「自媒体」や「新媒体」の台頭によって、中国におけるメディアと社会との関わりは大きく変化しつつあるように見える。この変化をどのような視点から捉えればよいのか。本特集は、こうした問題関心から、インターネットの普及が社会にもたらした変化の諸相をさまざまな切り口からアプローチした論者を集めたものである。中国人研究者の手によるものが多数を占めるが、これらが日本での研究にいささかなりとも刺激になることを期待する。

本特集の構成を簡単に紹介しよう。

まず、座談会では、長年中国メディアの研究に携わってきた北海道大学国際情報メディア学料の渡辺浩平氏、中国に向け日本関係の記事を発信してきた共同通信社記者・編集者の古畑康雄氏、日本で中国関係のドキュメンタリーを制作する中国出身のテレビディレクター房満満氏をゲストとして、また、中国政治研究、日中関係研究に携わってきた愛知大学現代中国学部の砂山幸雄氏を加え、現代中国におけるメディアの変遷、メディア規制の問題、ドキュメンタリー制作の課題などを語り合った。話題は海外に向けて中国をどのように発信するか、中国に対し日本をどのように発信するかという問題にも及んでいる。

房満満氏とは逆に、中国でドキュメンタリーの制作活動を精力的に続けている竹内亮氏へのインタビューも掲載した。竹内氏の発言から、中国で映像コンテンツを制作・発

信する環境の急速な進化や、日本関連の発信をする際の緊張感を窺い知ることができる。

論説では、多媒体が中国の大学における「思想政治教育課」に与えた影響および課題や改善の可能性について論じた張放氏の論説、日本人学生の台湾修学旅行を事例として、歴史観をめぐる双方向メディアとしての「中華文化」に着目した和田英穂氏の論説、中国学者がウィーチャット上で行う日常的な無駄話のなかで、どのような話題が取捨選択されているのか、またその背景には何があるかを分析した劉曉茜氏の論説、フィールドワークを重視する人類学や民族学におけるインターネット民族誌の可能性を試みた趙旭東氏の論説、郷土料理を実際に作る場面を映したショートビデオがアプリで広く配信される事例を挙げて、二一世紀の中国におけるデジタル化された食景観の形成を提示した劉征宇氏の論説、長年雲南省麗江地方の観光開発とその変化を現地調査して得た資料に基づき、エスニック・カルチャーリズムにおける新媒體の働きを検証した宗曉蓮氏の論説を掲載した。

また、本特集は新型コロナウイルスの感染拡大が続くなかで企画を構想したこともあり、コロナに関連して中国の公共医療と民間医療の実践や課題について、医療人類学の角度から景軍氏に論説を特別寄稿していただいた。

(高明潔)